

3. 今後の指導に向けて

【小学校国語】

- ① 漢字に関しては、「読み」は概ね良好であるが、「書き」については、昨年度に引き続き、課題を残している。無解答率も依然として高い。定着へ向けた授業や朝学習の時間を使っての日常的なとりくみが求められる。また、家庭と協力しての学習習慣の確立も求められよう。
- ② 辞書を積極的に活用して、語彙の拡充を図るとともに、文脈に合わせて正しい漢字を使えるようにする指導も重要である。
- ③ ローマ字の読み、書きで課題を残している。今後、コンピュータの使用機会の増加など、ローマ字習得の必要性は高まっている。母音と子音を基礎とした規則性の理解を軸に、いっそうの定着化を促進する必要がある。
- ④ 「接続語を使って一文を二分に分けて書く」という設問は、昨年度に引き続き、きわめて低い正答率であった。接続語は、文章の論理的な関係を把握するための大切な役割を果たしている。文や文章の構成について、学年の発達段階に応じた丁寧な指導が必要である。
- ⑤ 話し合い活動において司会者の進め方の良いところを説明する設問の正答率が、全国平均よりも20ポイント以上低かった。日常の意見や考えの伝え合いの活動を多く取り入れると共に、仲間の発表や司会の仕方の良い所を相互評価する機会をもつ必要がある。
- ⑥ 毛筆の書き方に関わる文字の大きさや配列等についての留意事項が理解されていない。書写の授業時間を適切に確保し、基本的な留意事項への的確な指導が必要である。
- ⑦ 報告文の目的や意図に応じて、必要な事柄を整理したり、事象や意見などを関係づけて書く力の大きな課題を残している。5, 6年生では、自分の考えを伝えるために、図や表、グラフなどを活用した多様な言語活動を豊かに展開する中で、書く力、伝える力を伸ばすようにしたい。
- ⑧ 相手の考えや意見を聞きながらそれと関連づけながら、自分の立場を明確にして、自らの考えや意見を書くという設問でも課題が残る。新しい学習指導要領では、パネルディスカッションなどの公開形式での討論が例示されている。実際にこうした場面を積極的につくり、考えをまとめ、表現できるような力を伸ばしたい。
- ⑨ 全体的に記述式の設問に課題を残している。国語の授業を中心にしながらも、書くことを意識した活動を全教育活動の中で意識的に取り入れていきたい。

【小学校算数】

- ① 数を四捨五入して概数で表すという設問で、昨年度に引き続き、全国と20ポイント近い正答率の差として出ている。授業での扱いに問題はないか、再検討の必要がある。
- ② 四角形の内角の和、三角形の面積の求積など、きわめて基本的な問題において、全国との正答率の差が10ポイント以上ある。基本を理解していない児童の把握、指導の工夫が求められる。

- ③ 資料を2つの観点に分けて分類整理し、表に表すという設問でも、全国と18ポイントの正答率の差がある。数量関係の学習が他の領域の学習との関係で、扱いが軽くなっていないか、吟味してほしい。
- ④ 基本的事項の定着をはかるために、授業や朝学習での再確認のとりくみ、学年をこえたスパイラルな学習の設定、家庭と連携した学習体制の構築等が必要である。
- ⑤ B問題では、新しい学習指導要領が明らかにした活用の力を問う問題が並んだ。正解を単純に求めればよしとする展開から、課題を式、表、図、グラフや言葉といった多様な言語を用いて、自分なりに表現し、伝え合う「算数的活動」の研究を推進する必要がある。数、小数を同じ数直線上に表す活動など、数の大きさや意味を調べたり表したりして理解する活動の充実を図ることが必要である。

【中学校国語】

- ① 漢字に関しては、小学校と同様に、「読み」については概ね良好な状況にあるが、「書き」については、課題を残している。また、無解答率の高いものも依然としてある。家庭学習も含めた反復練習が重視される必要がある。
- ② 言葉への関心を高め、言語感覚を豊かにする指導の工夫として、国語辞典や漢和辞典を使用する機会を意図的に設けることが必要である。
- ③ 「主語（主部）に対応させて述語（述部）を適切に書く」といった言語的事項としては基本的な問いに対する正答率が低い。言語活動を主体的に行うと共に、表現された言語に対する適切な指導が求められる。
- ④ 言語事項に関しては、「語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う」という設問群で課題が残るものがあつた。漢字の一句一句の指導も大切であるが、文脈を把握しながら理解をすすめる指導が必要である。
- ⑤ 短歌の理解では、形式に従って意味のまとまりをつかむという設問に課題があるが、作者の感動のありよう等は、句の切れめのとらえなど、作品の基本的な構造を把握できることがポイントとなる。散文の指導とは異なる丁寧な状況把握と共に、じっくりと指導を行いたい単元である。
- ⑥ 所与の情報や資料を的確につかみ、表現の仕方や特徴をとらえ、それらに表れている工夫を自分の表現に役立てながら、自らの考えを述べることができるような力を伸ばす必要がある。積極的に言語活動に取り組みせる授業の構成、工夫が必要である。

【中学校数学】

- ① 文字式、方程式の理解、処理など、かなり基本的な事項において、正答率が低く、課題が残る。
- ② 図形領域でも同様に、図形の基本的な性質にかかわる理解、処理において、課題が残る。
- ③ 数量関係（関数など）の領域では、さらに多くの課題点を残している。2つの量がともなう変化する関係の中での諸事象を考察するという抽象度の高くなる領域での丁寧で

工夫のある指導法が求められる。

- ④ 1年生で学習した領域の正答率が低い。新しい学習指導要領では、スパイラルな指導（反復指導）が掲げられた。それに関連しての時間数増加もはかられている。2年生の指導においても1年生の時の範囲の内容を考慮に入れた指導が求められる。
- ⑤ 事象の性質等について、根拠を明らかにしながら筋道立てて説明、証明するという問題に課題がかなり残される。日常的な授業の中に、かなりのウエイトで、数学的活動を取り入れていくことで、多様な数学的な言語を用いて、説明し合う授業が構築できると思われる。これまでのともすると、説明→演習型が多い授業からの転換が求められる。

【全体として】

- ① 小学校においては、昨年度に比べて、やや上向きな傾向性を見取ることができる。授業そのものの工夫、改善が進んでいることが推察される。今後も、授業力の向上に向けた校内研究を中心とした研修体制の充実が望まれる。
- ② 一方、小学校間における状況の差が広がっていることも事実である。とりわけ、B問題においてその傾向が顕著である。研究発表会等で、学校をあげて組織的に、活用の力を研究した学校にあっては、着実にその成果を上げつつあると言ってよい。やはり、教員相互の磨き合いの力は大きい。続く学校を期待したい。
- ③ A問題の正答率を上げていくためには、家庭での学習を習慣化・定着化させることが、必須の課題と考えられる。そのためには、授業の内容と家庭学習の課題のつながり、学校全体としての予習・復習、課題の設定等、組織的な検討が必要である。このことは、中学校においても同様のことが言える。
- ④ 中学校においては、昨年度に比べ、国語、数学ともに、正答率を下げる結果となっている。このことは、その年の3年生の生徒指導の達成状況と密接な関係があることは、かなりの程度で関連されるだろう。秩序と規律のある学校の状況は、教室に支持的で協同的な風土を招来させる。こうした風土は、生徒が学ぼうとする意欲にも深く関係する。逆に、無規律な集団状況下にある場合は、学習どころではない雰囲気生まれていく。
- ⑤ また、こうした前向きで健全な学年・学校の生徒状況は、問題解決に向かおうとする志気そのものにも直接影響する。中間層的な生徒のやる気をも急速に失わせ、大幅な正答率の低下へとつながる。生徒をみつめ、認め、励ます教育活動。あたたかく時に厳しい生徒指導が学習の前提として求められる。
- ⑥ 授業観、教育観の転換の課題がある。B問題は、活用の力を問うというとらえだけではなく、子どもたちに将来必要とされる能動的な学力を示していると考えられる。そうであるとすると、伝達型の授業、伝達型の教育からの脱却が求められている側面も大きい。自らの考えや思いを他の情報や根拠を勘案しながら、多様な形で表現し伝え合う中で、共に学びをつくりあげていくという営みを教科の授業だけではなく、総合、特活、道徳、行事活動等、幅広い分野も含めて展開していく必要がある。